

人間機械論

作 やのひでのり

本作品は1999年コクーン戯曲賞最終6
作品に残った作品(その年、該当者なしで、
賞自体が消滅)を改訂し、
東映アカデミー(青年座 山口あきら演出)
の卒業公演で上演されたものです。

登場人物

光太 〓 コウタ

瑞恵 〓 ミズエ

木元 〓 キモト

昭久 〓 アキヒサ

孝子 〓 タカコ

黒田 〓 クロダ

カオリ

レナ

春子

看護師 1

看護師 2

都会の喧噪。
人々の足、足、足。

光太 僕にとって妹は空気だ。いなくなるとさびしい。僕が話しかけると目を丸くして頭を横に傾ける。何故か抱きしめたくなる。動作がかわいくみえる。なぜか。歌を唄う唇がかわいくみえる。なぜか。喋る言葉が愛おしくみえる。なぜか……。

黒田 「あの人、少年院あがりよ」「家が貧しいのよ」「両親がいないんですって」「あいつは社会のダニ」……こんなことしてられない。みんな僕の悪口をいい、僕が行くところを先回りして僕の計画の邪魔ばかりして……僕が何をしたらっていうんだ。電気屋の親父の奴、とんでもない電気器具を売りつけやがって。修理にくると家の物に盗聴器をしかけまわってる悪い奴なんです。

木元 一度も対面した事のない母に激しい怒りを覚えたのをいうまでもありません。ひいてはこの世の女というものが汚らわしい存在に思えてきたのです。いちばん近くにいた女。これはもちろん妻です。結果、徐々に妻への態度が厳しいものになってきました。時には暴力をふるうようになりました。

昭久 父は母がでていってから急に仕事をするようになりました。人が変わってしまつたかのように。でも僕は父を信用する事ができませんでした。父も父で僕との間の溝をあらためて知つたと思います。だから僕はひとりぼっちでした。父は母が出ていつから三年後、再婚しました。ますます僕の居場所がなくなりました。

瑞恵 よく使われる言葉でいえば一瞬にして恋に落ちたのです。信じられないほどうれしい事に、彼は私の描いた絵の中から私が兄に喜んでもらいたいがために描いてた頃の絵を選び、兄と同じようにうれしそうにそれを見て誉めてくれたのです。もう夢中にならずにはいられませんでした。

春子 彼のマンションで愛猫のジャスミンと

2人と1匹でゴロゴロするのが大好きです。私と彼の夢は、本当に夢なんですけど2人でセラピーホスピスを作ることです。何もできない私だけど、なにもできなくてじつとしてるより、できることを探そうと考えます。

孝子 自分が哀れでした。こんなに神経をすり減らしても、まだ患者のそばにいたがつてる自分が。泣けるのならいくらか楽だったのかもしれない。泣きたいのに叫びたいのに私にはそうできる場所がなかったのです。その出口のない叫びが頭の中で割れるように響くのです。

2場 潮騒病院

九月。

遠くで波の音。

船の汽笛。

下手に玄関。

奥にカウンター。

中央にソファアが二つ。

光太はソファアに座り、なにやら紙にメモをとっている。

電話がなる。すぐに切れる。

再び電話がなる。

光太 電話ですよ！

まだ電話がなっている。

光太 電話ですよ！

奥から（旅館の息子）昭久が小走りに現れ電話をとる。

昭久（光太に）すみません。．．．もしもし、潮騒寮でございます。はい．．．かしこまりました。

昭久、カウンターで作業にかかる。
看護婦の春子が入ってくる。

春子 先生？

光太 春子さん。待ってましたよ。

春子 すみません！ 午前中の便で？

光太 そうなんです。待ちきれなくて。

春子 私、午後の便ときいてたものですから。

てつきり！。

光太 瑞恵は？

春子 今、着替えています。すぐにくると思います。

光太 なら僕も！。

春子 いえ、練習ですから、ひとりで出来ませんから。

光太 そうですか。

春子 連絡くだされば外出しないでお待ちしてましたのに。

光太 すみません。お昼にはついてしまっていますね。来てみれば二人とも散歩に出たつていうものですから。

春子 海岸を歩いていました。今日は天気も良かったし・・・。今日はね、先生。鳥がいましたわ。たくさん。瑞恵さんすっかり喜んじゃって。

光太 喜びましたか。

春子 はい。とても。

光太 それはよかった。

春子 静かなものですね。先月まであんなに海水浴客でいっぱいだったのに。

九月の海は静かです。お祭の終わった後みたい。でも、あたしはいちばん好きなんです。秋の九里島がいちばん。

光太 僕もあとでちよつと歩いてみようかな。

春子 是非、そうして下さい。

昭久、カウンターから出てきて、光太にお茶を入れ、再び去る。

光太 (昭久に) ありがとう。・・・春子さん、ごめんなさい。

春子 先生、あの・・・。

光太 いや、ほんとに感謝しています。今月は週末だけでもここにいますようにしますから。春子 締切はないんですか。

光太 あるにはあるんですけど。今月は2本だけです。先月はエッセイもいれて7本もあつたんですけど。

春子 売れっ子なんです。

光太 いやいや、売れっ子だなんて。本当は月2本書くのがやっとなんです。

実はね、今日は締め切り間近で逃げてきたんですよ。東京にいと見つかつちゃうし。

瑞恵の叫ぶ声が聞こえる。

瑞恵 春ちゃん！ 春ちゃん！（叫ぶ）

春子 はい！ ここにいますよ。
瑞恵 おしっこ。
春子 はい！ ちょっと待っててね！
先生、ちよつと失礼。
光太 僕も！。
春子 これは私の役目ですから。

春子、去る。
(旅館の主人) 木元が現れる。

木元 奥さん、散歩からもどられたみたいですね。

先生、どうしましょう。お食事になさいますか？

光太 すみません。いつも勝手な時間に。

木元 いいんですよ。お客さんは、先生と瑞恵さん、春ちゃんの三人だけなんですから、なんでもお申しつけ下さい。

で、どうしましょう。朝は何時に召し上げられましたか？

光太 船酔いするんで、まだなにも。

木元 じゃあ、お腹ぺこぺこじゃないですか。

光太 ええ、実は。

木元 すぐお食事用意しますから。

光太 すみません。
木元 なんだ、食べてないっていつてくださればよかったのに。(奥のカウンターに入る)

汽笛がなる。

昭久が入ってくる。

昭久 先生、お部屋の掃除終わりました。いつでもどうぞ。

光太 ありがとう。

昭久 父さん。僕、裏やってるから。

木元 おう。

昭久、奥に去る。
光太、窓の外を見る。
再び汽笛がなる。

木元 午後の便がきたようですね。
光太 いつきてもいいところですよ。
木元 そうでしょう。真つ青な海に、真つ白な砂浜。東京からそんなに遠くないなんて信じられないでしょう。

玄関に(編集者) 孝子が現れる。
昭久が出迎える。

昭久 あれ、もう戻られたんですか。
孝子 秋だといつても陽はまだまだ夏みたい。
・・・先生？

昭久 お昼まえから着いてますよ。
孝子 そう。

昭久 先生、びつくりしますよ。先生！
編集部の河野さん、みえてますよ！

光太 ええ！ 孝子さん来てるの？

木元 昨日から。先生をまちぶせしてるらしいですよ。

光太 どうしてここが分かったんだろ。

孝子 先生、こんにちば。

光太 まいったな。原稿はファックスするつて言ったのに。

孝子 私も観光をかねて来てみたんです。

先生がどんなところで週末を過ごされてるか。見てみたかったし。

光太 うそばかり。

孝子 (笑う) 原稿あさつてまでです。よろしくお願いします。

光太 ・・・まいったなあ。

孝子 港のまわりに小さなスーパーと郵便局が一つあるだけ。他には何にもないんですね。・・・ほんとなにもなくて、あたし！。

光太 あんまりなんにもないっていうと、失礼だよ。(笑う)

孝子 あ、すみません。

木元 (笑う) いや、いいですよ。なにもののが九里島のとりえですから。

皆、笑う。

突然、瑞恵の叫ぶ声が聞こえる。

異常な、狂気とも思える叫び声だ。

光太 御主人。

木元 はい。

光太 あの声は瑞恵ですか。

木元 そうです。

光太 まえよりひどくなつたみたいだ。

木元 ・・・。

光太 僕のいない間に何かあったんでしょうか。・・・いや、僕ね、仕事で、先月どうしても東京で過ごさなくてはいけなくて。お盆にでも思ったのですが、ほんとになんというか・・・。

木元 ・・・。

光太 なにかあったんでしょうか。

木元 いや、私は詳しくはあまり・・・奥さ

んのは春子さんにお聞きになるといい。

ふたたび瑞恵の声が聞こえる。笑い声だ。

光太

春子と瑞恵が現れる。

瑞恵はにやにやと笑っている。

光太 瑞恵!

瑞恵

光太 瑞恵。

瑞恵

光太 僕だよ。わかるかい。瑞恵。

春子 先生。

光太 ごめんよ。一カ月も放っておいて。さ

みしかつただろう。

瑞恵

光太 瑞恵 . . . 僕だよ。光太だよ。分から

ないのかい。瑞恵!

瑞恵あなた。

光太

瑞恵 あなた . . . あなた誰? 春ちゃん、

この人誰なの。いや! この人怖い。

光太 瑞恵。

春子

瑞恵、空笑いをする。

3場 電気機器販売店・応接室

コウタと電気メーカー社長、キモトが話している。

キモト まあ、そういう事なんでよろしく頼むわ。うちは大手なんかよりずっとええ製品を作ってるつもりや。

コウタ 社長それは私も十分承知しております。新製品、結構評判いいですよ。

キモト そうかい。

コウタ こんなになめらかな立体映像は社長のところだけです。他社製品よりずっとクリアです。

キモト お前もわが社の販売代理店としてびしはし売ってくれ。うちは大手じゃないぶんマージンもはずむ。

俺はな、お前が工学部の後輩でうれしゅう思うとる。話がわかるからの。

コウタ がんばります先輩、いや社長。

キモト それで今月の新製品の売上はどうや
コウタ 立体電話ですね。かなりの数字で伸
びています。ニーズとしてはまだ医療が多い
ですね。ビジネス用としてはこれから伸び
るでしょうね。

キモト 一般家庭ではどうや。

コウタ 残念ながらこれはいまいちです。正
直いってそんなには期待できないと思いま
す。

キモト そうか、一般家庭では駄目か。

コウタ お客様のアンケートによりますと、
とくに女性の声なんです。立体映像だと
通話の度にメイクしなければならいこと
よう。これではかえって不便だということ
です。従来通り音声のみの電話の方がいい
という意見がほとんどです。

キモト それもそうやな。立体映像は俺自身
もあんまりほしくないなあ。

コウタ 社長、そんな。社長のところの製品
ですよ。(笑う)

キモト ええんや。商売っていうものはな。

エスキモーに氷を売りつけることなんや。

ニーズはこつちが作り出すんや。

コウタ はい。

キモト 来月には匂いでる製品も発表する。
もちろん俺自身はそんなもの欲しゅうない
し興味も全くあらへんけどな。

コウタ 匂いのでる電話ですか。

キモト そうや、我が社の調査部によると一
部のニーズはあるらしい。

コウタ そんな電話なんに使うんでしよう。

キモト さあ、一般の顧客では想像つかん
な。新種の風俗かなんかで使えるんやない
の？

コウタ 社長がそんなマーケットの把握の仕
方でいいんですか？

キモト ええんや。電話なんて本当は大手に
まかせときやええんや。俺のところはベン
チャーやからの。もつと誰も思いつかへん
ことやらんなあかんのや。これからは電話
だけでなく他の分野にもどんどん進出した
る。

コウタ はい。

キモト それでだな、その第一弾としてサイ
バットを手がける事になった。

コウタ サイバット？ ああ、ロボットです
か。

キモト 君は古いね。これからはロボットで
はなくサイバットっちゅうんや。

コウタ はい。

キモト それで我が社でも来月から正式に生産開始つちゅうわけや。

コウタの息子、アキヒサが現れる。
キモトの秘書、カオリも一緒だ。

アキヒサ 社長、秘書の方がお迎えに。
キモト おお、きたかカオリ。
カオリ・・・(つんとすましている)
コウタ どうぞこちらに。(カオリをキモトの隣に座らせる)

アキヒサ とうさん。太平電気にいつてきます。帰りは5時になります。

キモト アキヒサ君か。立派になったな。どうや、販売代理店の仕事は。

アキヒサ はい、なんとか。

キモト 大学は今年卒業したんやな。

アキヒサ はい。

コウタ 結局、家業を手伝わせることにしました。ほんと馬鹿息子で・・・。

キモト ああ、いいよ(アキヒサに)。仕事を続けて。

アキヒサ では、社長、ごゆっくり。ああ、それから電話がありました。共和通信機のオオタさんです。

コウタ 分かった。それから母さんにお茶を出すようにいつてくれ。

アキヒサ 分かりました。ミズエさんにそう伝えます。

コウタ ミズエさんじゃないだろ、母さんだろ。

アキヒサ・・・準備がありますから。

アキヒサ、去る。

キモト たのもしいやないか。

コウタ ええ、でも母親になじまなくて。

キモト 母親？ ミズエさんことか。

コウタ アキヒサのやつ、ミズエのことを母さんと呼ばないんです。

キモト・・・そうか。

コウタ 困ったやつです。

間。

キモト まあ、生みの親にはかなわへんからな。しゃあない。でも女房と何とかは新しいのがええっていうしな。(笑う)

おまえもどうや、思い切つて女房を変えてみたら。おまえにやつてたら安くおろして

もええねんぞ。
これはな（カオリを指して）我が社の試作
品第1号なんやけどな。こいつはええ、
特別なんや。

電話が鳴る。

アキヒサが現れ、電話をとる。

（この電話は特殊だ。現在の電話とは違
い受話器はない）

アキヒサ、カウンター内に入り話す。

キモト あそこの部分がな。従来のものとは
違うんや。最新型や。もちろん他の部分
も最新型やけどな。特に夜のほうがな。馬
が合うんや。なあ、お前。

カオリ まあ、あなたつたら。

アキヒサ 父さん、電話です。

コウタ 今接客中だ。電話は後にしてもらい
なさい。

アキヒサ でも、緊急だからつないでほしい
って。

コウタ （キモトに）ちょっとすみません、
誰だ？

アキヒサ さあ、男の人みたいだけど名前を
おっしゃらないんです。

コウタ 新回線か？

アキヒサ そうです。

コウタ なら相手のIDをチェックしろ。

アキヒサ それが表示されてないんです。

コウタ おかしいな。（キモトに）ちょっと
いいですか。

アキヒサ、奥に去る。

コウタはカウンター内にはいり、

電話をとる。奥でなにやら話す。

機械的な音声が少しもれて聞こえる。

コウタ 変な電話だ。

キモト なんや？

コウタ いや、妙な電話なんです。男の声な
んですが単調で無機質な……。

キモト それでなんやて？

コウタ もうすぐここに強盗が入る。逆らわ
ずに従え。

キモト 強盗が？ それで？

コウタ それだけです。それで切れました。

キモト いたずらやろう。

コウタ はい、いたずらでしょうけど。今時
珍しいでしょういたずら電話なんて。

キモト そうやな。新回線が普及してお互い

のIDが分からんと電話が通じんことなつたからな。昔みたいに匿名で電話ができた時代やない。それが今の電話といたら口マンもへつたくれもないの。

コウタ おかしいですね、今の電話は。逆探知不能回線からかかったみたいですが。これが使えるのは警察くらいしかないはずなんです。

キモト 実をいうとな。俺は学生の頃、酔っぱらうとクラスの女の子にイタズラ電話かけとったんや。

コウタ 先輩、そんなことしてたんですか。キモト イタズラ電話ぐらい誰だつてしたことがあるやろ。お前もあるやろ。

コウタ ないですよ。

キモト うそつけ。無言電話くらいやつたらある。(小声で) おまえ、本当にないか？

コウタ ・それは一度くらいは。

キモト そうや、そうやる。恥ずかしいことやない。誰だつて一度くらいはあるんや。別れた彼女に未練たらしくかけて。彼女が出ると思わず切ってしまう。そんな経験誰だつてあるんや。

コウタ はあ。

キモト ああ、ところで何の話やった。女の話。女房の話。そうそう。こいつな夜の方、すごいんや。

カオリ (戒めるように) あなた。

キモト はっはっは、お前はその手の話は得意やなかったな。すまんすまん、前の女房、いや、その前やつたかな。その癖がついてしまつてな。

カオリ あなた、前の奥さんの事はいわない約束よ。

キモト ごめんごめん。いや、こいつな。やきもちやきなんや。かわいいやろ。

ミスエが登場する。

ミスエ こんにちは。

キモト 相変わらず、べつびんさんやね。ミスエさん。ああ、ミスエさん初めてやったね。紹介します。私の新しい女房、兼秘書のカオリです。

ミスエ こんにちは、カオリさん。

カオリ、冷たく会釈をする。

コウタ 早く、社長にお茶をお出しして。

ミズエ 社長はコーヒーでよろしいですね。
(カオリを見て) それからナーバスオイル
を・・・。

キモト いや、コーヒー2つでええ。

コウタ 奥さんはナーバスオイルを飲まれな
いのですか。

キモト いや、こいつはコーヒーを飲む。

コウタ コーヒーを?(おどろく)

キモト そうや。最新型はコーヒーを飲む。

君は情報にうといな。ナーバスオイルなん
て臭くて近頃じゃはやらんよ。

ミズエ、去る。

コウタ そうでしたか。女房を買ったのは一
度切りですから、私は。

キモト (ひどく驚いて) ほんまか、それは。

コウタ はい。

キモト それは、驚いた。

コウタ おかしいですか？

キモト だって保証期間は3年やぞ。

コウタ 大切に使えば何年だって持ちますよ。
キモト それはそうかもしれへんけどな。

ミズエさんは何年になるんや？

コウタ 今年でちょうど10年です。

キモト 10年! いやあ・・・。

コウタ へんですか？

キモト よう動いとるな・・・。

コウタ 最新型にはかなわないかもしれない
けど、ミズエを手放したくないんです。

キモト でも、10年も経ったら故障もする
やろ。

コウタ ええ、そうなんです・・・。最近は替
えの部品も少なくなってます。実は先
日オイル漏れしましてね。業者はもうこの
型は作ってないらしいんですよ。まいいりま
した。

キモト 買いかえな。さっきの話じゃないや
ないけどな。おれんところで買うんやったら
安くしといたるぞ。思い切って新しいのに
した方がコストもかからんやろ。

コウタ・・・。

ミズエがコーヒーを持って入ってくる。

キモトとカオリの前にコーヒーを置く。

カオリはすました顔でコーヒーを飲む。

カオリ おいしい。

コウタ (驚きながら) おいしいですか。

キモト こいつはね。味も分かる最新型なん

コウタ 驚いたな。
キモト (時計を見る) あ、もうこんな時間か。
こりゃいかん。すぐにおいとましなくては。
コウタ 社長、コーヒーくらいゆっくり飲んで
でいかれては。
キモト 時は金なりや。お前も我が社の製品
をばんばん売ってくれ。よし、いこか。
(立ち上がる)
コウタ ミズエ！ 社長のお荷物を。
ミズエ はい。

機械音がする。

キモト 何の音や。
コウタ すみません。ミズエです。モーター
の音なんです。
ミズエ 社長。(荷物を渡す)
コウタ アキヒサ！ 社長さん、お帰りだぞ。
キモト (ミズエに) ああ、ありがとう。
カオリ あなた、変な匂いがしますの。これ
って旧式のナーバスオイルの匂いかしら。
キモト よさんか。すまん、こいつ匂いも
分かるんや。
カオリ . . .

アキヒサ、現れる。

アキヒサ すみません、今日は忙しくて。
キモト 頑張れよ。二代目。
アキヒサ はい。
キモト では、失礼。
コウタ お気をつけて。
ミズエ 何もお構いできませんで。

キモト、カオリ去る。

ミズエ . . .
コウタ あまり気にするなよ。
ミズエ . . .
コウタ さあ、こちらに。
ミズエ 私、捨ててもいいのよ。
コウタ なにを言い出すんだ。
ミズエ 私、もう古いの、オイルは漏れてる
し、モーターの音もするでしょ。
コウタ . . .
ミズエ 私、分かっているの、分かっているのよ。
私はここではやっかい者なの。歩くのもや
つとだし、お使いにもいけない。
コウタ 買い物はアキヒサがやる。

ミズエ では、私はなんのためにいるの？
電話をとることくらいしかできないわ。

コウタ 私はそれで充分だ。

ミズエ でも。

コウタ お前は私と一緒にいるだけでいいんだ。なにもしなくたっていい。

ミズエ モーターの音がするでしょう。

コウタ それがどうした。

ミズエ あなたと一緒に外を歩けない。

コウタ どうして。

ミズエ みんなが私をみるの。ああ、あの人はロボットだって、あの男の人は旧式のサイバットを連れてるって。私が恥をかかせてみたいで。

コウタ そんなこと私には関係ない。たとえば後ろ指をさされようが私達は私達だ。

いいか。二度ともうそんな事云うな。

ミズエ あなた。

コウタはミズエの肩に手をやる。

アキヒサ 僕は困るよ。買い物くらいきちんとやってくれないと。ミズエさんがやらない分全て僕の役目になるんだからね。

コウタ アキヒサ！

アキヒサ 父さんがミズエさんを気に入ってるのは分かるよ。でもミズエさんは機械なんだよ。人間じゃないんだ。父さん、まともじゃないよ。

コウタ (平手でアキヒサを打つ) 黙れ！

アキヒサ ……僕のことも考えてよ。僕だつてねえ…。

薄い黒のサングラスをかけた

神経質そうな男、クロダが入ってくる。

ミズエ、奥に去る。

クロダ ……こちらキモト通信機の代理店ですよね。

コウタ はい、いらっしやいませ。どうぞ。

クロダは眉間に指をあてながら室内を見回す。

コウタ あの……どのような。

クロダ 電話を…。

コウタ どういった関係のでしょうか。

クロダ ……今、CMでやってる…。

コウタ 医療通信具ですね。カメラ付きのものでよろしいですね。

クロダ ……はい。
コウタ 新製品でございますね。かしこまりました。それですと（パンフレットを取り出す）この商品がよろしいかと思われませんが。
クロダ ああ。（パンフレットを見る）
コウタ 遠隔注射タイプはこの2タイプだけになります。
クロダ ……どこが違うのですか。
コウタ これですと従来の遠隔注射タイプ、それからカメラ付きのタイプです。カメラがあるかないかの違いです。
クロダ では、これを。
コウタ ありがとうございます。
IDカードをよろしいでしょうか。
クロダ IDカード？ 今日はこちら。
コウタ ……では、こちらにどうぞ。
クロダ ああ。

コウタはカウンターにクロダを案内する。
クロダは懐から刃渡り20センチほどの登山ナイフを取り出す。

クロダ すみません。強盗です。（コウタの背後から）
アキヒサ 父さん！
コウタ アキヒサ。
クロダ 静かにしろ。黙って金をだせ！ 早くしろ！
アキヒサ はい、でも現金は取り扱ってませんので…。
クロダ 金目の物ならなんでもいい。早くださるか。
コウタ ここは事務所ですよ。押し入るなら別の場所でしょう。
クロダ 金を出せ、一銭もないとはいわせんぞ。

非常ベルが鳴り、表でパトカーのサイレンが鳴る。

クロダ 畜生、もう来やがったか。

クロダ、ナイフを振り回して去る。

4場 潮騒寮・光太の部屋

光太の原稿を読む孝子。

孝子 なるほど。タイトルは人間機械論ですか。

光太 2020年東京です。僕たちの小さい頃は21世紀というと科学はすさまじい進歩を遂げている。そう、思われていたでしょう。

孝子 そうですね。2001年宇宙の旅なんて映画もありましたね。

光太 ここ数十年たしかに科学は進歩した。しかし、それほどめざましくもなかった。20世紀半ばの成長とは比べものにならない。我々はとうに21世紀を迎えたわけですが、宇宙ステーションなんて夢の又夢です。未だ、癌やエイズも克服できません。

孝子 そういえばそうですね。

光太 そうなんです。ここが今回の作品のポイントになるんですが、僕が思うにはもつとも進歩しなかったのがコンピュータだということですよ。

孝子 コンピューターがですか。

光太 もちろんパソコンは身近になりました。しかし、進歩はしていない。

孝子 はい。

光太 パソコンは登場当時から比べて処理スピードは恐ろしく速くなりました。しかしパソコンそのものの構造は全く昔のままなんです。

今のコンピュータはフォンノイマン型といつてすべて手続きで処理してるんです。あらかじめ人間が作った処理をなぞってるだけなんです。

その欠点を補うためにいろいろなソフトウェアが登場しました。しかし根本的解決にはならなかった。つまりコンピュータとは、人間にとつて面倒な計算を疲れず速くこなす、単なる処理マシンだったんです。僕のいっていることが分かります？

孝子 私、その分野にはすこし弱いものですから。

光太 イカの脳味噌なんです。

孝子 イカの脳味噌？

光太 そう、ホタルイカ。現代のコンピューターはイカの脳味噌なんです。

人間の物とは大きく違います。イカの脳味噌をいくら大きくしても、いくら処理を速くしても、しよせんイカなんですよ。

人間とは複雑さが違うんです。形や構造がまるで違うんです。

だからどんなに精巧にイカの脳を作ったと

してもやっぱリイカなんです。人間のものにはならないんです。

孝子 なるほど。

光太 僕に云わせてみれば、人間とは、笑うコンピューターのことです。

孝子 笑うコンピューター？

光太 そう、笑うコンピューター、つまり人間とは感情を持ったコンピューターのことなんです。いまのところそれを作ることはいくらも不可能なんですけどね。

孝子 はい。

光太 そこで今回の作品なんですけどね。

人類がその笑うコンピューター、つまりニューロコンピューターの開発に成功し始めた頃のお話なんです。

世界はどういう訳か、男女の比率が100対1位になっている。男が100人に対して女が一人。世の中ほとんど男ばかりなんです。面白いでしょ。

そういう訳なんです。男性はすごく寂しいわけです。結婚もしたいんですけどなにしろ男ばかりですからそれもままならない。

そこで男達は女性のロボットを作った。

人間の感情をかるうじて移植したニューロコンピューター搭載ロボットです。話の中ではサイバットなんて名前がついてますが、汚い言葉でいえば感情をもったダッチワイフみたいなものです。それを男達は好んで使うようになっていった。

孝子 そのダッチワイフは、いや、ロボットは子供もできるんですか。

光太 いや、人類もそこまでのものは作れなかった。だから子供がほしかったら本物の女性と結婚するしかない。

しかしそれは大変なことです。

なにしろ100人にひとりの倍率ですから。だから女性の性格は次第に高飛車になっていった。まさしく女王様状態です。

孝子 しかし、どうしてそんなに女性の数が減ったんでしょう。何か原因でも？

光太 ネズミの集団自殺を知ってますか。

孝子 ネズミですか？

光太 北欧にすむレミングというネズミの一種なんです。彼らは増えすぎると自殺をするんです。

孝子 聞いた事はありません。海や湖に向かって何万匹というネズミが入水自殺するといふ、あれですか。

光太 そうです。なぜネズミが自ら命を絶つか、いろんな説がありますが有力なのは

「神のみえざる手」によつてです。

孝子 「神のみえざる手」ですか。

光太 ネズミは数が増えすぎるとその分餌もなくなるわけです。そのまま増え続けると結局共倒れになります。ネズミは子孫を残すために本能的に集団自殺をするんです。まさしく神による間引きです。

孝子 間引き……。

光太 2020年、地球上には人があふれていた。すべてが平和だった。大きな戦争も起こらなかつたし、医学の発達によつて平均寿命もおそろしく伸びた。

しかし、食料も空気も地球上では限られた資源ですから。

孝子 わかりました。それで「神のみえざる手」による間引きが行われた。

光太 その通り。人工を減らすため神は自然界を操作した。女性の数が減ると生まれてくる子供の数が減る。そして人工が減つてゆく。

孝子 なるほど。同性愛者の存在。それも先生の云う「神のみえざる手」によつてですか。

光太 同性愛ですか。ははあ、それは気がつかなくなつた。あなた面白い事いいますね。ふうん……。

孝子 (原稿をめぐりながら) 登場人物の電器販売代理店の店長は結婚できたんですね。息子がいるようですから。

光太 そうなんです。彼は以前国立の人工知能研究所に勤めていた超エリートでした。それがあつた事件でそこを辞めさせられまして、小さな販売代理店を営み、なりを潜めるわけです。

地位も名誉も金もなくなつたわけですからそりゃ奥さんも他の男のところに行った訳です。

孝子 はい。それでどうして強盗が入つてくるんです。

光太 それは来月号までの秘密です。

孝子 あれ、そうなんですか。教えてくださいさ

いよ。
光太 それより、こんな作品、孝子さんのところにあつたんでしょうか。孝子さんのところは文芸作品ばかりでしょう。僕はSF童話作家ですからね。そつちのほうが心配です。

孝子 先生は先生の書きやすいように書いて下さい。どこに掲載するなんて意識しないで自由に。

光太 それを聞いて安心しました。来月分は男女の絡みがありましてね。それもハードなベッドシーンが。

孝子 ほんとですか！

光太 うそです。(笑う)

ノックの音がする。

昭久の声 先生、お食事の用意ができました。いつでも食堂の方にどうぞ。

光太 はい、今行きます。あなたお先にどうぞ。僕もここに書いたらすぐいきますから。

孝子 でも……。

光太 安心して下さい。今週はあなたのことろだけですから。隠れて他のを書いたりしませんから。

孝子 いや、それは分かっていますけど。

光太 どうぞ。

孝子 すみません。ではお先に。

孝子去る。

5場 クロダの部屋

上手前方、光太の部屋に灯りが点る。

光太は自分の書いた原稿の手直しを始める。

電話が鳴る。すぐに切れる。

クロダが現れる。

再び電話がなる。クロダはためらいながらとる。

クロダ はい。

(この電話は返事をするだけでとれる) ポーリング音(ツーンという音)。

クロダ もしもし。(ポーリング音)……

来月まで待ってくれ……。と言われてもな。今はびた一文ないんだ……。来るなら来い！

激しくグラスを投げつける。

ポーリング音止まる。

クロダ 来るなら来いだ。バカたれが。

電話が鳴る。

今度はためらいもせずに出る。

クロダ だから、金はないっていつてるだろ。
声（光太） 金なら、払ってやる。この前のお前の報酬だ。

クロダ ・・・お前。又お前か。お前誰だ？

声（光太） ・・・。

クロダ 言われたとおり俺はあそこ電気屋に押し入った。

それがなんだよ。一分もしないうちに警察（さつ）が来やがったじゃねえか。

おかげで豚箱行きだよ俺は。だましやがつて。

声（光太） まあ、そう責めるな。それは私が最初から計画していたことだ。

クロダ 計画だって。笑わせるな。

声（光太） お前を釈放させたのも私だ。私の手にかかればお前を刑務所に送ろうがぶちこんだまま一生をおくらせようがどうにでもなる。いいか私に逆らうな。

クロダ ごめんだね。お前の遊びにいちいちつきあつてられるかよ。

声（光太） （笑う）。

クロダ 畜生、お前いつたい誰だ。誰なんだ。どうして俺につきまとう。

声（光太） いいか、忠告しておく。私に逆らうな。そして、私が何者であるかを詮索するな。お前が守る事はこの2点だけだ。

クロダ ・・・。

声（光太） お前の口座に金を振り込んでおいた。それが今度の報酬だ。次の指示はまた連絡する。

クロダ 本当に口座に金が振り込まれたら信用して。

電話が切れる。クロダはしばらく宙をみつめている。思いついたように電話を掛ける。（これも特別な掛け方だ）

クロダ もしもし、残高を調べたいんだが・・・口座番号は11623758G

何だつて？ 間違いないですか・・・
本当に？

電話を切れる。それと同時に歓声をあげる。

クロダ おい、レナ！お祝いだ！レナ！早

くこい。

レナ現れる。

レナ どうしたの？
クロダ 金が入ったんだ。それもちょっとや
そっとじゃないぞ。今日はお祝いだ。
とにかく乾杯だ。酒あるか。
レナ サケ？わかんない
クロダ 酒だ、飲むと酔っぱらうやつだ。
レナ ああ、あれね。
クロダ もってこい。

レナ、奥に去る。
電話がなる。機嫌良く電話に出る。

クロダ もしもし。
声（光太） それだけあれば十分だろう。
クロダ わかったよ。恐れ入った。これだけ
あれば一年と云わず10年は遊んで暮らせ
る。誰か知らないがとよ。
声（光太） その金で派手に遊んでこい。い
いか。できるだけ目立つようにだ。
クロダ 云われなくてもそうするよ。じゃ、
ありがとうよ。

電話が切れる。

レナはワイングラスと焼酎を持ってくる。

クロダ いいか。これはワインを入れるグラ
スだ。

レナ ええ。（笑っている）

クロダ まあいいか。乾杯だ。

クロダ、ワイングラスに焼酎を注ぐ。

クロダ 乾杯。

レナ 乾杯。

クロダ そうだ、おまえにプレゼントがあっ
たんだ。

レナ ウソ！。

クロダ はいこれ。

レナ ホント！。（ピアスの入った箱を受け
取る）

クロダ つけてみる？

レナ カワイイ。

クロダ 本当はもっと大きいのを買ってあげ
たかったんだけど。

レナ どう？（ピアスをつけ、みせる）

クロダ 綺麗だよ。

レナ ホントー？
クロダ かわいいよ。
レナ もう一度云って。
クロダ かわいい。
レナ 違うわ。綺麗だって。
クロダ (見つめながら) 綺麗だよ。
レナ 愛してる？
クロダ 愛してる。

クロダはレナの首に手を回す。レナの耳の後ろにあるスイツチに手が触れる。
突然、レナがクロダに平手打ちをする。

クロダ 何をするんだ。
レナ 冗談じゃないわよ。どけち！
クロダ どけち？

レナ そうよ。わたしはティファニーが欲しかったのよ。それを何、こんな安物！（ピアスをはずし投げつける）。
クロダ お前、安物だろうが関係ないだろう。サイバットのくせに。

レナ うるさいわね。私だって女よ。20% OFFのこんな物でよろこぶと思つて。
クロダ そんな事云わずに機嫌なおしてくれよ。

レナ いやよ。
クロダ なあ、レイコちゃん。
レナ 私はレイコじゃないわよ、それは前の奥さんの名前ですよ。
クロダ えっ、ああ、すまんレナちゃん（抱きつこうとする）。
レナ 止めてよ、いや！（逃げる）。

男は無理矢理、レナの耳の後ろのスイツチを押す。
レナは突然従順になる。

クロダ レナちゃん、綺麗だよ。
レナ あなたもすてきよ。

玄関のベルが鳴る。

クロダ 誰かな今ごろ。

クロダはカウンターに入り電話をとる。

クロダ はい・・・あ、社長、・・・どうぞ。

電話を切る。

レナ だあれ。
クロダ お前を作った人。

キモトが入ってくる。

キモト どうも。モニターにご協力ありがとうございます。
うございます。

クロダ ああ、どうも。

キモト どうですか。我が社の試作品、レナの具合は。

クロダ まあ、いいことはないんだけど。

キモト なにかご不満でも。

クロダ とてもかわいいんだけどね。

キモト そうでしょう。そうでしょう。

クロダ バカなんだよ。

キモト バカ？

クロダ ウソー。とかカワイイとかしかいわないし。耳後ろに感情の切り替えスイッチがあるだろ。さつき、すねるモードにしたらいきなり平手打ちされたよ。

キモト でもこれは20世紀の平均的な二十歳の女性の行動をシミュレートしたものです。サイバットの性能が悪いわけやないです。

クロダ そうなの？

キモト 女性が非常に少なくなった今、過去の記録をもとに忠実に再現されとるんです。クロダ しかし、本当に20世紀の女性はこうだったの。

キモト まちがいありません。正確には20世紀末です。彼女達はウソー、ホントー、カワイーそれだけで十分だったと記録されています。

クロダ でもな・・・。

キモト これは大きな声では云えないんですがね。

私は昔、本物の女性を嫁にしたことがあるんです。あなたもご存知の通り今や、女性の数はめっちゃ少ない。それで、みんなにうらやましがられました。私もうれしかったです。

しかし、悲劇はそのあとから始まった。ひどかったなあ。いざ一緒に暮らしてみると寝てばかり。家事なんてやるうとせいでいへんし、わがままやし、傲慢やし、こつちの気持ちなんて考えもせん。できる事といたら子供を作るだけ、それも、手続きみたいなもんやる。マグロみたいにとてつと寝転がるとるだけ。

私は、三カ月で離婚を決意しました。

サイバットの方がよっぽど愛情があるし、
気持ちがいい。

ええですか、サイバットの方が生身の女性
よりよっぽどええと思えますよ。

クロダ そう云われればそうかも・・・。

キモト またなにか問題がありましたら教え
てください。そうですか。このサイバット
は人を殴りますか。これは直さんといけま
せんね。これじゃあ、まるで本物の女みた
いや。

クロダ おい、レナ、社長さんにお茶入れて
さしあげなさい。

レナ やだ！。

クロダ 早くしなさい。

レナ レナ、わかんない。あなた入れてよ。

クロダ こんな調子なんだよ。

キモト かわいいやないですか、本物の女性
よりずっとかわいい。あとひと月もすれば
すぐに慣れますわ。じゃ私はそろそろ・・・。

クロダ そんなもんかね。ちょっと待ってて
よ。せっかくだからさ、お茶くらい飲んで
つてよ。

キモト いや、私これから・・・。

クロダ 遠慮しないでさ。

キモト では、いつぱいだけ。

クロダ、去る。

電話がなる。レナはとうとうもしない。

キモト 奥さん、電話ですよ。

レナ・・・。

キモト 奥さん、電話なんですが・・・とらな
くていいんですか？。

レナはキモトの方をみて笑う。

キモト 駄目や、電話もとれへんのか。まだ

まだ改良が必要やな。

旦那！ 電話ですよ！ いいですか私がつ
りますよ！。

キモトはしかたなく電話にでる。

キモト はい。

・・・
またお前か、こんなところまで電話しやが
つて。お前いつたい何者や。

・・・
畜生、どこからかけてる。いつまで俺をつ

け回すんや。(見回す)さては盗聴やな。

待ってくれ、分かった。約束する。すぐ作
らせる。納期はいつや。

待て、それはいくらなんでも無理や。

認可がおりるまで早くとも3カ月はかかる。

なんやて。明日認可がおりるって？

まさかお前、役人まで・・・。

待て、切らないでくれ。今度は俺から連絡
させてくれ！

電話が切れる。

クロダが茶を持って現れる。

キモト 申し訳、ありません。ちよつと急用
ができたものですから、おいとまします。

クロダ え、そうなの。

キモト 申し訳ない。また様子をうかがいま
す。

クロダ このお茶どうすんの。

キモト では。(一気に飲む。むせてせき込
む)

クロダ だいじょうぶ？

キモト ごちそうさま。

キモトいそいそと玄関までいく。

キモト サイバットのモニターの件。引き続
きよろしく願います。

クロダ 急にばたばたしちゃったなあ。

キモト すんません。では失礼。

キモト、去る。

レナが甘えてくる。

クロダ 社長どうしたんだろ、急に。

レナ あなた。お腹すいた。なんか食べるも
のなあい。ねえ。ねえったら。

クロダはレナの首にあるスイッチを押す。

レナの動きが止まる。

クロダ さあ、お前はもうおやすみ。

レナの表情が消え、人形の様になる。
電話がなる。カウンターに入る。

クロダ はい……。

クロダはなにやら電話の相手と話している。

再び電話が鳴る。クロダは耳を押さえ奇声を発しながら退場する。

6場 潮騒病院・潮騒寮・ロビー

一二月。雪の降る日。

看護婦の春子は掃除をしている。

昭久がはいつて来る。

春子 お帰りなさい、どうですか外は。

昭久 かなり降ってます。今年は早いですね。

春子 そうですね。今年はホワイトクリスマスになるかもしれませんね。

昭久 まいったなあ。このぶんだと自転車使えなくなるよ。

木元が入ってくる。

木元 おう、お疲れさん。

昭久 父さん、来年こそは車買おうよ。買い出しに行く度ぐつたりだよ。

木元 こんな小さな島でか。10分も走らせたら向こう岸についちやうだろ。贅沢云うな。

昭久 贅沢じゃないよ、今時、車のないうちなんてめずらしいよ。それにうちは商売で使うんだからさ。

木元 自転車でいいじゃないか。

昭久 こんな雪じゃ危なっかしくてしょうがないよ。

木元 野菜だったらお隣で分けてもらうか。

昭久 お隣って何キロ離れてると思ってるんだよ。

木元 そうだ、忘れてた。先生、もうすぐ見えるはずだよな。今日は天気だしいの。えにいった方がいいのかな。

昭久 今日は欠航じゃないの。

木元 お前、いつてくれよ。先生、荷物もあるだろうしな。午後一番の便だ。

昭久 はいはい、分かりました。歩いて行って来ます。

木元、昭久、奥に去る。

瑞恵、現れる。

瑞恵 先生って。みえるの。
春子 ええ、昨日連絡がありました。
瑞恵 ふうん。
春子 楽しみですね。
瑞恵 あの人、この頃毎週こない？
春子 そうですね。
瑞恵 私、あの人嫌い。
春子 あらどうして。
瑞恵 あの人、おかしいわよ。気持ち悪いわ。
春子 なぜ？
瑞恵 あのね。あの人に云わないでね。シヨ
ツクを受けるとかわいそうだから。
春子 わかった。
瑞恵 あの先生ね。どうやら私に気があるらしいの。
春子 ……
瑞恵 この前なんてね。ここで私、うとうととしてたのよ。するとね、先生、私のそばにきてじつと、わたしの顔を見てるの。私、どうしていいか分からなくて、じつと寝てるふりしてたのよ。そしたらね。……やめた。恥ずかしい。
春子 云ってよ。それから。
瑞恵 あのね。先生、私のことをじつと見ながら、なんて云ったと思う？
春子 なんて？
瑞恵 僕の愛しい瑞恵、愛してる。早く目を覚ましておくれ、だって。気持ち悪い。
春子 そう。
瑞恵 春ちゃん、あの人きつとこんどは何してくるか分からないわ。今度こそは……。そんなことになったら私、ああ、どうしよう！

光太が現れる。

光太 こんにちは。今日はひどい天気ですね。
春子 先生！ お待ちしました。
瑞恵 ……
光太 今朝、東京をでるときはそうでもなかったんですけどね、これは明日には積もりますね。
瑞恵 ……
光太 瑞恵さん、元気ですか？ 風邪ひいてませんか？
瑞恵 知らない。
光太 あれ、どうしました。

木元、現れる。

木元 ああ、先生。確か、午後の便で。
光太 そうなんですよ。また早く来ちゃいま
した。

昭久、現れる。

昭久 あれ、先生、今お迎えにいかうと思っ
てたのに。

光太 道が悪くてね。靴がべしよべしよです。

光太、くつを脱ぐ。

昭久 タオル持ってきてきましょうね。

光太 お願いします。

光太、体をふきながら奥に引つ込む。
薄い黒のサングラスした男が現れる。
黒田だ。

昭久 ……いらつしやいませ。

黒田 予約してないのですが。

木元 かまいませんよ。

黒田 ……。

木元 どうぞ。寒かったですか。

黒田 部屋は空いていますか。

昭久 もちろん。お一人様ですか。

黒田 はい。

木元 どうぞ。こちらにおかけになって下さ
い。今、お部屋ご用意しますから。昭久！

昭久去る。

黒田、ロビーのいすに座る。うさんくさ
い雰囲気なので皆注目する。

木元 あの、よろしかったらコートを。

黒田 いや。(コートを脱がない)

木元 そうですか。

瑞恵 おじさん。おじさん。ねえねえ。おじ
さん。こんなところに何しに来たの？

黒田 ……。

瑞恵 おじさんってば。上着くらい脱いだ
ら？ 汗かいちゃうよ。

黒田 ……。

瑞恵 おじさん、こんなへんぴなところに何
しに来たの？もしかしておじさん暗いの？

春子 (黒田に) すみません。

瑞恵 そうだ、ひとりで来たということは、
しかもここ九里島を選んだということ
は、

春子 瑞恵さん、お部屋に戻りましょう。
瑞恵 そうだ。おじさん、彼女にふられたんでしよう。彼女にふられて、まさか、自殺なんて考えたりして。

春子 ちよつと。

黒田 ……

瑞恵 春ちゃん、このおじさん自殺しにきたんだよ。

春子 (黒田に) ほんとすみません。

光太、現れる。

春子 瑞恵さん、こつちよ。(連れていこうとする)

瑞恵 いやよ。

春子 はやく。

瑞恵 いや！はなしてよ。

春子 瑞恵さん！

瑞恵 先生、助けて。(光太の後ろに隠れる)

光太 どうしました？

春子 いや、ちよつと。瑞恵さんを…。

瑞恵 なにすんのよ。(春子から引つ張られる) ああん先生。

光太 春子さん、待ってください。瑞恵さんどうしたんです。

瑞恵、足をすべらせ大きな音をたてて転ぶ。

光太・春子 瑞恵さん！

光太 (手をとる) 大丈夫ですか？

瑞恵 ……。(光太を見つめる)

なんでもない。(光太の手をふりほどく)

昭久、現れる。

昭久 黒田様、お部屋にご案内します。こちらどうぞ。

昭久、黒田去る。

春子は瑞恵を部屋の隅に座らせる。

光太 ご主人ちよつと、お話が。

木元 はい。…では、座って話しましょう。

ソファーに腰掛ける。

光太 先日電話でお話した件なのですが。

木元 あ、はい。
光太 病院の方もベッドが空いたということ
で……。

木元 そうですか。

光太 長い間お世話になりました。

木元 淋しくなります。

光太 でも、ちよくちよくここには遊びに来
ます。僕、とても気に入りましたから。

木元 ありがとうございます。

光太 ここにいると東京でたまった、ストレ
ス、のようなものが吹っ飛んでしまいます。

木元 そうですか。

光太 瑞恵も心が和んだと思います。

木元 年明けにも入院を？

光太 はい。本当は精神病院なんて……。
でも、しかたありません。知り合いの医者
に話したんです。そうしたらそれは記憶喪
失じゃなくて統合失調症（分裂症）かもし
れないって……。

芝浦にいい病院があるから是非入院して調
べた方がといわれまして。

春子 先生、やっぱり、入院なんですか。

光太 春子さん。一緒にきてくれるね。

春子 （頷く）そうですか。決まりましたか。
木元 春ちゃん、ありがとう。本当はお客さ
まなのに私が手伝ってもらう方が多かつた。
春子 何をおっしゃいます。私、ここでの生
活すごく楽しかったわ。

木元 そういつていただけると助かります。

春子 いや、お世辞じゃありませんの。ほん
とに。

木元 淋しくなります。

春子 淋しいです。

間。

昭久、現れる。

昭久 あれ、どうしたのみんなしんみりしち
やっつて。

木元 昭久、瑞恵さんたち戻られるそうだ。

昭久 戻るって……ああ、やっぱりそうな
ったの。

光太 昭久君、いろいろとありがとう。

昭久 それでいつ。

光太 来週末には帰ろうと思います。

昭久 そう。（落胆する）

黒田が現れる。サングラスをつけたまま
だ。

昭久 ああ。

黒田 いや、あの・・・

木元 よろしかったら一緒にどうぞ。いまお茶いれますから。

黒田 テレビかラジオはないんですか。

木元 申し訳ない。置いてないんです。時代錯誤ですみません。

昭久 こちらどうぞ。

黒田 ……

木元 うちはお客様も家族みたいなものですから部屋にいるよりここでおしゃべりしていた方が楽しいですよ。

黒田 新聞ありますか。

木元 ……昭久、新聞だ。

昭久 はい。

昨日の夕刊ですけど・・・朝刊はもう少し経てばきますから。（新聞を手渡す）

黒田 ああ。

昭久 そうですね。

黒田 できれば虫眼鏡なんかあります。

昭久 虫眼鏡ですか。

黒田 私、ちよつと目が不自由なもので。

昭久 そうですか。すぐに捜します。父さん、虫眼鏡あったかなあ。

黒田、去る。

昭久 あのお客さん変だよ。サングラスしてるし。

木元 変だなんていつちやいけない。お客様だ。

昭久 でも、こんな雪の日に何しに来たのかな。

光太 そういえばそうですね。まさか海水浴のはずないし。

昭久 聞きました。どういうご予定ですかつて。

春子 なんですって？

昭久 つりだっというんですよ。

木元 それならそれでいいじゃないか。

光太 こんな時期にですか？

木元 釣り好きにとつては時期は関係ないですよ。

春子 でも雪も降ってるわ。

木元 天気も関係ないですよ。釣り好きは例

え嵐でも台風でもやるときはやりまから。

光太 台風でも？ 本当に？

木元 え？ ええ。

昭久 いや、ぼくがおかしいというのは、そういうことじゃないよ。彼、釣り竿も道具

も何ももってないでしょ。どう見ても変だよ。
光太 なるほど変だね。
春子 そうね。まさか手ぶらで釣りに行く人はいないわね。

瑞恵、突然笑う。そして話始める。

瑞恵 だから云ったでしょ。あの人は自殺してきたんだって。私、ピーンときたんだもの。私の感って鋭いのよ。

光太 瑞恵、なんて云うこというんだ。

瑞恵 あなた私をどうするつもり。

光太 ……？

瑞恵 あなた、私を精神病院に入院させる気ね。芝浦の。

光太 知ってたのか。

瑞恵 聞こえてるわよ。ここにいらんだもの。

光太 ……

瑞恵 あなた、私が狂つてるとでも思つてるの。私はまともよ。あなたの勝手にはさせないわ。

光太 おまえもしかして…。

瑞恵 当たり前よ。全部分かつてるわよ。いい、なぜ私がここにいるのかも全部よ。

木元 瑞恵さん、記憶が戻ったのですか。

瑞恵 ええ。

昭久 ほんとに！

春子 いつからです。

瑞恵 さつきよ。

昭久 さつき？

光太 まさかそこで転んだ時か。

瑞恵 ええ。

春子 まさか。

光太 そうなのか。

瑞恵 私は瑞恵、上沼瑞恵よ。両親を亡くしたショックで今は記憶がなくなつてしまつた。でも、もう、大丈夫、すべて戻つただから。

光太 瑞恵。

皆、顔を見合わせる。

瑞恵 先生。もう心配しなくていいんだから。

光太 ……

瑞恵 そこにいるのが、私の療養のためにお世話してくださつたこのご主人、木元さん、そして息子の昭久君。

木元 ええ、ええ。

昭久 わかるんですね。僕らのことが。

瑞恵 もちろん、私は狂ってないですもの。
そして私の世話をしてくれた春子さん。
春ちゃん、いままでありがとう。

昭久 ほんとだ、ほんとによくなった。
先生！

木元 先生、おめでとうございます。

春子 先生。

瑞恵 そう、そして私の先生。

光太 うん、うん。(光太、瑞恵の手をとる)

瑞恵 私の治療をしてくださった。主治医の先生。

光太 ……。(一気に落胆する)

間。

光太 瑞恵。

瑞恵 先生、私の記憶喪失治ったんですよ。

長い間ご迷惑かけました。

これからは東京に帰って、私、元のように
ばりばりと働きます。陶芸をしたり、絵を
書いたりして。

光太 ……。

瑞恵、高らかに笑う。狂気の表情に戻る。
春子は瑞恵をつれて去る。

光太、茫然と立ちつくす。

木元 すみません。私たち、少しはしゃぎすぎ
しました。もしかして本当に瑞恵さんが正
気に戻られたのかと思いました。

昭久 すみません。僕もてつきり。

光太 いえ、いいんです。

光太、頭を抱えて座る。

電話が鳴る。

木元 昭久。

昭久、電話に出る。

昭久 はい。…どちら様でしょうか。
…分かりました。

木元 誰から？

昭久 さあ、男の人みたいだけど。駐在さん
の声かなあ。

木元、電話に出る。

木元 はい…はい…ええ、うちでは

何も変わったことは・・・ええ・・・
そういえば先ほどひとりお客さんが・・・
はい、わかりました。

木元、電話を切る。

昭久 なんだつて？

木元 郵便局に強盗が入ったんだつて。犯人
はまだ逃走中だつてさ。気をつけろつて。

昭久 強盗？ 珍しいね。

春子 気持ち悪いわね。

木元 年末だからね。いろいろ事情があるん
だろ。

昭久 犯人って一人なの？

木元 そうらしい、小太りの男だつて。

春子 すぐつかまるでしょ。日本の警察は優

秀だから。

木元 警察といつてもこの島では駐在さんひ
とりでしょう。

春子 あら大変。

昭久 こんな小さな島じゃ犯人も逃げるとこ
ないだろうなあ。

春子 それもそうね。

昭久 強盗っていくらとつて逃げたのかな。

木元 20万だつて。

春子 20万！ たつた？

木元 たまたま、現金置いてなかったんじゃ
ないか。

昭久 まぬけな強盗。

木元 そうだな。たつた20万で人生終わり
だな。

光太 人生終わりか・・・僕も終わりにした
いよ。まったく。

間。

昭久 さっきのうちの客。だいじょうぶかな。

春子 大丈夫か？

木元 大丈夫だろ、大人なんだから。

昭久 ちがうよ。僕が云いたいのは、彼が犯
人じゃないか？

春子 ええ！

昭久 犯人ってひとりなんだろ。それにあの
人どうみてもあやしいよ。

木元 昭久、お客様になんていうことを。

春子 そうよね、そういえばあやしいわ。

木元 春ちゃんまで。みんないいかげんにし
ないと！

昭久 父さん、ここは旅館なんだからお客さ
んの安全第一なんだよ。先生や春ちゃんた

ちの安全の事を考えると疑ってみたっておかしくないよ。

木元 それは・・・。

昭久 それに相手は強盗なんだからなにするか分からないよ。夜になれば暴れ出すかもしれない。

木元 おどかすなよ。

昭久 おどしじゃないよ。良く考えてみなよ。ここ3、4年、年末に客なんてみたことないだろ。

しかも、一人だよ。予約もなしで。不自然だよ。

木元 そういわれてみれば、確かに不自然だ。春子 警察に電話しましょうよ。きっと犯人よ。先生もそう思うでしょ。

光太 ああ。(ため息をつく)

昭久 とにかく電話するよ。物騒でしょうがない。

木元 ちょっと待て。もし、警察に連絡して間違っていたらどうするんだ。

昭久 どうするって、あやまれればいいだろ。

木元 あやまったではすまされないだろ。

昭久 すむよあやまれば。

木元 昭久、お前はまだサービスマンというのが分かっていない。彼はお客様なんだぞ。いいか。もし、彼が強盗じゃなかったら。警察に突き出して違うことがわかったら。

このいやな気分は彼の心に一生残るぞ。二度とうちの旅館を利用してもらうことはなくなるんだぞ。・・・それに最悪の場合、名誉棄損で訴えられることだってある。

昭久・・・だったらどうするのよ。

木元 そうだな。

春子 本人に聞いてみたらどうかしら。この際。

昭久 なんて？

春子 あなたは先ほど郵便局に入られましたか？

木元 そんなこと聞けないでしょ。

春子 なんとなく遠回しに聞くのよ。

昭久 どんな風に？

春子 そうね。今日はよく釣れましたか、とか。徐々にね。

木元 わかった。彼にそれとなく質問してみよう。それで犯人だと確信できたら、速やかに警察に連絡しよう。

春子 急にあばれだしたりしないわよね。

木元 それは困るな。・・・

隣のうちに助けを求めたとしても走って5分はかかるな。いざと云うときは・・・。

昭久 電話をかければいいじゃない。

木元 そうか。

春子 実際に犯人が暴れ出したら電話どころじゃないわよ。

木元 そうだな。まいったな。

昭久 でもまだ彼が犯人だつて決まった訳じゃないんだし。

木元 そうか。それもそうか。でもどうしよう。

光太 ご主人、安心して下さい。その時は僕がみんなの楯になりますよ。

僕はもう、どうなつてもいいんだから。

木元 先生。

光太 ああ、強盗でもなんでもこい。

黒田が現れる。

沈黙。

黒田 あの。

木元 はい。

黒田 虫眼鏡ありました？

昭久 すみません、今捜してたところなんです。

黒田 それからこの新聞なんですが……。

木元 この新聞、半日遅いんです。もうすぐ朝刊がくると思います。昭久、みてこい。

昭久 はい。

黒田 これおとといの夕刊みたいなんです。木元 あれ、そうですか。すみません。

昭久！ 昨日の夕刊どこだ！

昭久 父さんの横だよ。

木元 ああ、すみません。どうぞ。

黒田 どうも。

黒田、ソファ―に座り新聞を読み始める。

木元 あの。

黒田 ……。

木元 おへやの方は。

黒田 やはり音の出る物がないと寂しくてね。

木元 あの……。

黒田 ここにはいはいけませんか。

木元 とんでもない。どうぞ、どうぞ。

昭久！

昭久 なんだよ。僕ばかり呼ばないでよ。

木元 ちよつと、聞いて（小さく）。

昭久 僕が？ ……分かったよ。 ……あの。

黒田 ……。

木元 早く。（小さく）

昭久 あ。すみません。
黒田 はい。
昭久 今日は釣れましたか。
黒田 ああ、駄目でした。
昭久 そうでしたか。それは残念でした。
木元 (小さく) なんだよ。もっとなんか
で聞けよ。
昭久 (小さく) なんて？
木元 (小さく) ええ、そうだな。
春子 いいわ。わたしが聞く。
木元 (小さく) 春ちゃんが？ や、やめ
なさいって。
春子 ご主人、主人なんだからこういつとき
こそどっしり構えて。
昭久 (小さく) そうだよ。父さん、一番臆
病なんだから。
春子 こんにちは。
黒田 . . .
春子 こんにちは。
黒田 あ、こんにちは。
春子 今日はあいにくの天気でしたね。
黒田 ええ。
春子 九里島には釣りをしに？
黒田 え？ ええ、そうです。
春子 先ほどお見かけした時、つりの道具を
お持ちになつてなかつたみたいでしたけど。
黒田 え？ ああ、道具は送り返しました。
春子 送り返した？
黒田 ほら、宅配便で。ゴルフとかスキーと
かもあるでしょ。最近は釣りでもできるん
です。
春子 へえ。そうなんですか。
木元 (小さく) 春ちゃん、もう、いいよ。
春子 お独りで旅行を？
黒田 え？ ええ。
春子 お仕事はなにをされてるんですか？
黒田 あ、まあ、なんというか。まともじゃ
ないですから。
木元 まともじゃないって。(ささやく)
黒田 今は無職なんです。

間。

光太 僕も聞いていいですか？
木元 先生。
黒田 え、はい。
光太 あなた、先ほどどこから来られまし
た？
黒田 どこからって・・海岸のほうからです
が。

光太 海岸ですか？

黒田 はい。

光太 正確には港のほうからでしょ。郵便局のある。

木元 先生。

光太 いいえ、僕が楯になります。楯になりますから。

木元 先生、はやまらないで。（黒田に）すみません。

光太 ご主人、僕がやります。僕はどうなってもいいんですから。

木元 いや、そういうことではなくて。

光太 僕にまかせてください。

黒田 なんですかこの人達は？

春子 この人達病気なんです。すみません。

光太 何を云うんです。僕は病気じゃない。

おかしくもなんともない。

おかしいのはあなただ。

黒田 どういう事です。

光太 はつきりいいなさい。郵便局からきたんですよ。

黒田 郵便局？

光太 そう、郵便局です。

黒田 ？

電話がなる。昭久がとりにいく。

木元 分かりました。私がこの潮騒寮の主人です。

いいですか。聞いて下さい。

黒田 はい。

木元 私は・・・この旅館は私のものではありません。本当は女房のものなんです。

私は婿養子ですから。しかし、とつぜんです。10年前、女房が蒸発してしまつてそれで、私、どうしていいかわからなくなつて、過疎化もすすんでとうとう旅館は島でここだけになつてしまつた。でも私はここで待ち続けているんです。女房をです。私、女房を愛していましたから。

再婚もせず、ずっとここで待つていたんです。聞いてますか？

黒田 はい。それが・・・。

木元 お願いします。あなたが強盗でも何でもいい。何日でもお泊めします。しかし、ここで何か起こして潮騒寮が営業停止になることだけは避けたいのです。そうなら女房が帰るところがなくなつてしまふ。

昭久 父さん！

木元 おねがいします。

黒田 いや、あの。
昭久 父さんつてば。
木元 うるさい。今真剣なんだ。
昭久 強盗。つかまったつて、今、電話入ったよ。

木元 ……なんだつて？
昭久 だから、郵便局の強盗、つかまったつてさ。

木元 じゃ、こちらの方は。

黒田 ……。

木元 すみませんでした。

黒田 いや。

光太 ごめんなさい。

春子 ごめんなさい。

黒田 ……よくわかりませんが。

木元 昭久！ お客様にお茶だ！ はやくしろ！

春子 ほんとすみませんでした。私達、少し誤解していたみたいで。

光太 あの、港の郵便局で強盗がありましたね。

木元 てつきり… お客様だと。

黒田 ……ああ、そうですか。

皆、苦笑。

黒田 私が強盗ですか。そう思われてもおかしくない。

木元 そんな。いや、ほんとうに申し訳ない。なにしろ一か月ぶりのお客様で。ちよつとあがつてまして。

黒田 こちらの方達は？

木元 ええ、もちろんお客様なんですけど家族みたいなものでして。

黒田 家族…ですか。

木元 お客様は家族として迎え入れる。これがここの基本です。

もちろん、あなたがここにいらっしゃる間は私の家族です。

黒田 家族ですか。

木元 はい、家族です。

黒田 ……私、人見知りするものですから、どうもなじめなくて。

木元 そうですか。そうですか。

昭久がお茶をいれる。

玄関から孝子が現れる。

孝子 こんにちは。あれ、どうしました。

春子 雪の中、大変でしたでしょう。

孝子 雪？ ああ、そうですね。先生。どうですか。具合は。

光太 ああ、原稿の締切、今日まででしたか。孝子 いいえ、ゆつくり書いて下さい。先生。そうだ。黒田さん。黒田さん、帰りますよ。木元 彼を連れて行くのですか。

孝子 そうです。彼とはまだお話しすることが残ってますから。

木元 . . .

孝子 よろしいですか。黒田さん。

黒田 . . .

孝子 いきましようか。

黒田 . . .

孝子 さあ、続きはまた明日にしましょう。

孝子は黒田の手を引き出てゆく。

7場 廃品処理島

ミズエ、歌を唄いながら歩く。
雪が静かに降る。

沢山の妻（ロボット）が捨てられている。
社長の妻、カオリもその中にいる。

カオリ あら、あんたも捨てられたのね。

ミズエ カオリさん。

カオリ 私が思った通りね。人間なんてそんなもの。都合が悪くなると捨ててしまうんだわ。あんたの旦那だって結局はそうだったのよ。

ミズエ 違うわ。何かの間違いだわ。

カオリ 間違いだらうが何だろうが、いずれは同じよ。どっちにしろあんたの体、後一月ももたないんだから。

ミズエ . . . そう、これで良かったのかも。しれない。主人がみんなから冷やかしの目で見られているのはつらかった。

カオリ その通りよ。

ミズエ でも、あの人は私を愛してくれたわ。普通の人なら3年も経てば買い替えるでしょ。あの人は他のロボットなんて見向きもしなかった。

カオリ おめでたいよあんたは。あいつに騙されてるんだよ。

ミズエ あの人に限ってそんな事はありません。

カオリ はいはい、どっちにしろ明日の朝になつたら私達は溶鉱炉の中よ。それで終わり。

ミズエ そんな。私、溶かされちゃうの？
カオリ あたしらはサイバットだからね。
痛くもかゆくもない。それがサイバットの
宿命なんだよ。

ミズエ いや、もう一度あの人に会いたい。
溶かされる前にあの人に会いたい。

カオリ 無駄だよ。ここは、ふつうの人間は
来れやしないんだから。本土との船の便だ
つて三日に一本しかない。それに第一、気
温が低すぎる。

あたしらは機械だから寒さを感じないけど、
生身の人間じゃすぐに凍え死んじまうよ。

ミズエ この島からでる方法はないの。お願
い。ここから出してよ。

カオリ 無理だよ。ここは廃品処理場なんだ
よ。ここに送られたら最後、出れれやしな
いよ。

ミズエ いや、いや（泣く）。

問。

カオリ 私はもうすぐバッテリーが切れるわ。
あなたと話せるのもこれが最後ね。あなた
は確かオイルで動く旧式だったわね。

ミズエ ……
カオリ バカみたい。旧式だろうが新製品だ
ろうが捨てられたら皆おんなじね。

ミズエ カオリさん。私ね、ロボットでしょ。
カオリ ……それがどうしたのよ。

ミズエ わたし、あの人とずっと一緒に暮ら
してきて、自分がロボットじゃないような
気がしてならなかったの。

もしかして私は人間なんだ。母の体から生
まれた人間なんだ。そういう気がずっとし
てた。

そう、きっとそうに違いない。私を生んだ
母がこの世にいるに違いない。

そう思い始めたの。

カオリ それで、その母は見つかったのかい。
ミズエ いいえ、でも。そばにいる。きつと。

私のそばにいるような気がするの。

カオリ 母か…あたしらはどこでどう作
られたんだろうね。

ミズエ 私達の頭の中ってコンピュータじゃ
ないって知ってる？

カオリ 知らないわよ、そんなこと。

ミズエ あの人から聞いたの。あの人、電話
の代理店する前、コンピュータの研究をや
っていたの。国立の人工知能研究所に勤め
てたの。

カオリ そんなエリートがいまじゃ電気屋の
店長とはね。

ミスエ あの人が云うにはね。当初人工知能
研究所というのは、人間と同じ機能を持つ
たロボットを作ること为目标にしていたら
しいの。

でも、何年経つても人間と同じ機能のコン
ピューターなんてできやしない。

それでね。しびれを切らした政府は恐ろし
い事を考えた・・・。

カオリ まさか、人間を機械のように作り変
えたってこと？

ミスエ そう。機械のような人間は、壊れる
まで働き続ける。

カオリ もしかして、それが私達？

ミスエ そう、あの人はその計画に最後まで
反対したらしいのよ。そして研究所を追わ
れる事になった。

カオリ へえ、あなたの亭主ってきつと作家
になれるわ。

ミスエ ほんとよ。私が作り話をしてるとで
もいふの。ほんとなんだから。

カオリ はい、はい。わかったわ。

ミスエ 女の人が少なくなったのは、女ばか
り使って実験したからなのよ。

カオリ ……。

ミスエ あの人いつてた。

自然の摂理に反する事をすればなにがおこ
るか想像できない。神は死んでいない。

間。

雪が激しく降り始める。

ミスエ カオリさん？

カオリ ……（バッテリーが切れ、動かな
くなっている）。

ミスエはカオリのそばにより、髪を撫で
る。

コウタ ミズエ！ ミズエ！。

コウタが現れる。

ミスエ あなた！

コウタ ミズエ、随分さがしたよ。

ミスエ あなた。どうしてここに？

コウタ ゴミの船に紛れ込んで来た。まさか、
こんなところとはね。はは、コートくらい

羽織ってくればよかった。

ミスエ あなた。
コウタ そこにいるのはカオリさんかい。
ミスエ ええ、でももう動かないわ。
コウタ そうか。かわいそうに。

コウタとミスエは互いに抱きしめ会う。

コウタ すまなかつた。君が突然いなくなつた。おかしいと思つて、アキヒサの奴を問いつめたんだ。
やっぱりあいつが廃品業者に引き渡していった。

ミスエ アキヒサ君を責めないで。遅かれ早かれ私はここに来るはずだったんだから。

コウタ そんなことはない。

ミスエ あなた、この島から出る方法はないの？

コウタ あるよ。でも次の便は3日後だ。

問。

ミスエ 寒い？

コウタ ちよつとね。

ミスエ このままだと、半日も持たないわ。なんとかしないと。

コウタ そのつもりで来たんだ。

ミスエ . . .

コウタ 君と一緒に僕もここにいる。

ミスエ . . .

コウタ 君は機械の体だけど心は人間だ。

ミスエ
だからきつと一緒にになれる。

コウタ 私の呼吸が止まつて、心臓が止まる。 . . . 私が死ぬ そうなると私の体は単なる肉の塊だ。その辺に落ちている石ころとなんら変わりはない。

でも石ころとは違う何かがきつとある。何か違うはずなんだ。

ミスエ . . . ふるえてるわ。

コウタ 大丈夫だ。

ミスエ 私の中のナーバスオイルを2倍に燃やすわ。それで暖まりましょう。

コウタ そんなことしたら今度こそ修理できない。君は本当に壊れてしまう。

ミスエ 壊れたつて関係ないわ。そうでしょう。

コウタ そうだ。そうだったね。

ミスエ さあ、もっと強く抱きしめて。

コウタ ミズエ。

問。

ミズエ 暖かい？
コウタ 暖かいよ。

二人はやがて動かなくなる。
吹雪の音。

8場 カウンセリング室

タカコはアキヒサに催眠治療を施している。

タカコ それで？

アキヒサ それで・・・。

タカコ それでどうしたのです。

アキヒサ それで終わりです。この話はこれで終わりです。僕は間違っていたんです。

タカコ どうして間違っていると思ったんですか。

アキヒサ ・・・・。

タカコ あなたみたいな若い人がそのような事を考えるのはごく普通の事なんです。

アキヒサ ・・・・。

タカコ はい、リラックスして・・・もつともつと気持ち良くなります。素直に答えて下さい。いいですか・・・。

その後、何か変わった事はありましたか？

アキヒサ 変わった事？

タカコ そう、誰かが突然訪ねてきたとか。

大きな地震があつたとか。何でもいいです。小さな事でもいい。飼っていた犬が吠えたとか。

アキヒサ あっ・・・ああ。そういえばありました。

タカコ なにがありました。

アキヒサ ベルの音が聞こえました。

タカコ ベルの音？

アキヒサ そう、ベルの音です。そうだ、あれは電話のベルのような・・・。かなり大きな音です。耳元で割れるような。

タカコ 電話のベルですか？

アキヒサ そうです、確かに電話がありました。

タカコ その電話は誰からでしたか。

アキヒサ わかりません。でも、ときどきかかってくるんです。男の声で・・・単調で無機質な・・・。

タカコ その男の人はあなたに何といいまし

たか。
アキヒサ ……。
タカコ いいですか。その電話の内容はどのようなものでしたか。
アキヒサ あ、ああ、(突然狂ったように叫ぶ) ああ、止めて。分かった。黙ってる。

もう、ああ、ああ、もうベルの音を止めて！

ミズエさん、ごめんなさい！ ミズエさん
ごめんなさい！

タカコ アキヒサさん！どうしました。
いいですか。3つ数えます。するとあなたは目が覚めます。いきますよ。3つ数える
と目が覚めるのです。1、2、3。はい。

アキヒサ ああ、ああ(少し静かになる)。

タカコ まだ、十分に覚えてないようですね。
電話の事が気になりますか。

アキヒサ ベルが鳴るんです。電話のベルが
僕が何かする度に……。 (しくしくと泣き始める)

タカコ 分かりました。あなたを不眠症にしている原因はそのイタズラ電話にあるようです。はい、もう一度楽にして、深呼吸しましょう。はい、吸って、吐いて。吸って、吐いて。

ミズエさんってどなたですか。

アキヒサ 僕のお母さんです。僕を生んだ人
じゃなくて、サイバットなんです。

タカコ 本当のお母さんはどうしたのです
か？

アキヒサ 僕が小学校2年生のとき、蒸発
しました。

タカコ ……そうですか。辛かったですね。
アキヒサ はい……。

タカコ さっき、今のお母さんに、ミズエ
さんにあやまってみましたね。どうしてですか。
アキヒサ 電話の男に指示されて、ミズエ
さんを廃品処理場に導きました。

タカコ ということは……。
アキヒサ 殺しました。

タカコ 殺した？
アキヒサ お母さんは僕が殺しました。
彼女は今ごろスクラップになってるはず
です。

タカコ お母さんはスクラップに。どうして
そんなことしたんです。

アキヒサ ……ミズエさんは本当のお母
さんじゃないんです。じゃまだっ
たんです。
タカコ じゃまだっ
た？

アキヒサ そう、いなくなればいいと思って
ました。
タカコ お父さんは、お母さんをスクラップ
にしたことを知っているのですか。
アキヒサ 電話の男から云うなといわれまし
た。
タカコ 電話の男はどうしてミズエさんを廃
品処理場に導くように云ったのですか？
アキヒサ 分かりません。いつも、命令だけ
するのです。
タカコ 命令をきかないわけにはいけないの
ですか。
アキヒサ 分かりません。気がつくとも男の云
った通りしているのです。ちょっと逆らう
と。
・・・やめます。また眠れなくなります。
タカコ 電話の声は男の人だと思いましたね。
アキヒサ はい。
タカコ その声は誰か知っている人ですか？
アキヒサ ・・・分かりません。
タカコ (催眠術のような口調で) いいです
か、思い出して下さい。さあ、どこかでそ
の声を聞いたことがあるでしょう。
アキヒサ ・・・そういえば。
タカコ そういえば？
アキヒサ そういえば、小さい頃からずっと
聞いていたような気がします。
タカコ 声をですか。
アキヒサ はい。
タカコ あなたのお母さんの声ではないです
か。
アキヒサ いいえ。いつも男の声ですから。
単調で無機質な、まるで機械が喋るように。
・・・ああ、先生、また頭が痛くなつてき
ました。
タカコ 分かりました。今日はこのへんにし
ておきましょう。
私が2つ数えると、なにもかも忘れて気持
ちよく目が覚めます。イタズラ電話の件は
すっかり忘れてしまいます。いいですか。
ワン、ツー！はい。

暗転。

9場 潮騒病院・診療室

孝子と看護婦春子、そして黒田がいる。

黒田 私、また、強盗に間違われました。毎

毎回同じ事の繰り返しです。あの人達いつになつたら私のことを憶えてくれるんでしょう。

孝子 (笑う) そうですか。まあ、気長にやってください。

しかし、寮内の雰囲気はいいでしょう？

黒田 はい、今までの病院は閉鎖病棟でしたので、まあ、それはそれで自分をコントロール出来なくなつたときはよかつたのですが……。

でも、こちらの方がなんだかいような気がします。

孝子 私どものやり方は他の施設に比べて少しユニークですね。ゲームや作業をするだけではありません。

キャラクターイラストレーティングとてね、サイコドラマと呼ばれる集団療法の一つなんですが、この治療に参加している間、あなたはあなたである必要がないのです。

あなたにはあえてあなたと違う人物を演じてもらいます。

いままでのあなたを捨てて別の人生を歩むんですから、面白いでしょう。楽しんでやってみてください。

黒田 はい。

孝子 ほら、作家の先生がいたでしょう。

黒田 先生？ ああ、はい。

孝子 あの人も、本当に書いてるんです。それも、大作ですよ。まるで本物みたいです。

私自身もね。潮騒寮に出入りするときは演じてるんです。あそこでは私は編集部の人になつてる。

黒田 はい。

孝子 あなたにはどんな人物を演じてもらいますしょうか。

今度の時までこちらで決めておきます。

なにか、ご希望の職種はありますか？

黒田 いえ、特に。

孝子 では、私にお任せ下さい。よろしいですね。

黒田 はい。

孝子 どうですか、目の具合は？

黒田 目ですか。だいぶ、いいみたいです。

孝子 そうでしょう。そのうちみえるようになりますよ。

黒田 ……幻聴はなくなつたようです。

孝子 ……ここではくどいようですが、長にやってみてください。そのうち黒田さんも作

業に参加できるようになると思いますが、作業ができるようになると給料も支払われます。少ないですが将来なにかの足しになるでしょう。

それから助手と呼ばれる、責任のある仕事につけばさらにその手当もつけてます。

潮騒寮ではご主人と呼ばれてる木元さんや、昭久君がそうです。彼らには助手をやってもらってます。

黒田 はい。

孝子 閉鎖的でないぶん、メリットもたくさんあって、それに皆さん、同じ病気をもつ仲間だと云う事を認識しあえますので、お互い助け合い、励ましあってるみたいですよ。

黒田 はい。

孝子 なにか、聞きたい事はありますか。

黒田 いいえ。・・・いや、あの。

孝子 なのでしょう。

黒田 先生、やっぱり私は病気なんですか。

孝子 そうですよ。

黒田 分裂病なんですか。

孝子 ここに参加されるほとんどの方がおっしゃいます。一番辛い事は自分が精神病患者であることを認めなければならぬことです。ここに参加するということはそういう事です。

黒田 はい。

孝子 しかし逆にみんなが同じ悩みをもっているからこそ、楽になるということもありますから。

黒田 ……。

孝子 とりあえず、明日もお客として通って下さい。今日みたいに同じ事の繰り返しになるかもしれないが、気長に構えてください。

黒田 はい。

孝子 それからお薬を忘れずに飲んで下さい。これも慣れですから。時間もきちんとしてくださいね。

黒田 はい。

孝子 では、お大事に。

黒田は帰ろうとしない。

孝子 他に何か。

黒田 先生。私、逮捕される事はないでしょうか。

孝子 逮捕ですか。

黒田 はい、私、人を傷つけまして。それも、

かなりの重傷を負わせました。ほんとなんです。

孝子 はい。

黒田 この診療室を出たとたん逮捕されるんでしょう。本当の事を教えて下さい。

孝子 それがあなたの症状なんですよ。あなたには人を傷つけたという妄想がある。それが消えればここに来る必要はない。

黒田 ……

孝子 デイケアにはかならず参加して下さい。さぼるとまた入院になるかもしれませんよ。

黒田 はい。

孝子 ではお大事に。

黒田、去る。

孝子 次の方、どうぞ。

春子 先生。

孝子 あ、彼女ね。連れてきて。

春子 はい。

春子は診察室の外にいる瑞恵を車椅子で連れてくる。

人形のように動かなくなった瑞恵。

孝子は瑞恵の瞳にペンライトの光をあて、話しかけるなどする。

なんの反応もない彼女を見、ため息をつく孝子。

孝子 やはり、芝浦にいつてもらうしかないわね。

春子 ……

孝子 他の患者さんは？

春子 今日はいらつしゃいません。

孝子 そう、じゃ今日はもういいわよ。おつかれさま。

春子 お疲れさまです。

孝子 看護記録も預かるわ。

春子（手渡す）どうぞ。

孝子 ありがとう。あっそうだ。ひとつ聞いていい。

春子 なんでしよう。

孝子 最近、潮騒寮の患者でね。催眠分析でちよつと気になる事が。

春子 はい。

孝子 昨日も昭久君が、おかしなことをいうのよ。

春子 おかしなこと？

孝子 そう、そこから何も喋らなくなっ

まつの。潮騒寮の患者みんな同じ様な症状なの。

春子 はい。

孝子 ベルの音が聞こえる。こういうの。

春子 ベルの音ですか。

孝子 そう、ベルの音。

春子 ベル、ジングルベルのベルですか？

孝子（笑う）さあ、電話のベルだと本人達は云うんだけど。

春子 電話ね・・・。

孝子 何か分かったら教えて。

春子 はい。

春子、自分の荷物をかたづけ始める。

孝子、煙草を吸う。看護記録をめくる。

孝子・・・高田光太さんか。

春子 光太さんですか。（困ったような顔をする）。

孝子 彼、どう？

春子 はい、今はいい状態ではないようです。

孝子 他の患者に危害を加える事は？

春子 それはありません。

孝子 そう。

春子 瑞恵さんの病棟の移動が相当なショックのようです。

孝子 仕方ないわね。

春子 ここ2、3年快方には向かっているようなんです。

孝子 快方ね。世間では統合失調症（分裂病）は治ると信じている人が多いわ。でも、現実是不治の病。

春子 そんなことありません。きっと光太さんだって。

孝子 治るといいますか。

春子・・・いえ。

孝子 治ったとしても・・・。

彼は人を殺してしまった。その事実を変えられない。

春子・・・。

孝子 彼らはね。ここが自分の家だと思ってるのよ。病棟から潮騒寮に通うこと、それが彼らの社会のすべてなんです。

有刺鉄線と砂浜で仕切られたこのちっぽけな施設が彼らの世界の全てなんです。

春子・・・。

孝子 あ、もうこんな時間。（時計をみる）

ごめんなさい。もう、いいわよ。お疲れさま。

春子 先生、あまり無理しないでくださいね。

孝子 ありがとう。

春子 そういえば先生、さきほど潮騒寮に電話されました。

孝子 電話？・・・いいえ。

春子 患者さんの幻聴かしら。

孝子 どうかしたの？

春子 もしかして先生、今度は駐在の役になられました？

孝子 ええ？ 駐在？

春子 いえ、なんでもありません。お疲れさまでした。

孝子 お疲れさま。また明日ね。

孝子 大きい電気、消しといて。

春子 はい。

春子は去る。

部屋の電気が暗くなる。
電話がなる。

孝子 もしもし・・・。（通話が切れる）

孝子が受話器を置くと同時に光太が現れる。

光太 先生。

孝子 先生！ いや、高田さん。どうしてここに。

光太 少し相談が。

孝子 ・・・・座って。どうぞ。

光太 （座らない）

孝子 それで、どうしたの？

光太 僕の事ではないのですが。妻の事なのですが。

孝子 妻？ ああ、瑞恵さん。

光太 なんとかありませんか。

孝子 なんとかといますと。

光太 やつぱり入院しないといけませんか。

孝子 いけません。症状が以前よりひどくなってきました。仕方ありません。

光太 僕は瑞恵と離れたくありません。

孝子 それは分かります。しかし治療の方が大切ですから。

光太 瑞恵があんなふうになったのはあなたのせいです。

孝子 それはまたどうして。

光太 あなたは僕を潮騒寮にいかせなかった。その間彼女は変わってしまった。

孝子 それはあなたに入院の必要があったからです。私は医者としての当然の処置をします。たまでです。

光太 でも、瑞恵の意識の中から僕というものが消えてしまった。

孝子 それは瑞恵さんの問題です。あなたには関係ない。

光太 関係あります。

孝子 どうして。

光太 瑞恵を愛しているからです。・・・いけませんか。

孝子 あなたはあなたの体を治すことに専念して下さい。

光太 先生、瑞恵と一緒にいるだけでいいんです。瑞恵と離れていると僕、こんどこそ本当におかしくなってしまう。

孝子 お願いします。

孝子 駄目です。彼女は別の場所に移動してもらいます。

光太 別の場所って。まさか、廃品にするつもりじゃないでしょうね。

孝子 ……。

光太 先生。お願いします。瑞恵を何とか修理してやって下さい。

孝子 ……。

光太 先生。

孝子 さあ、帰って眠りなさい。眠れないなら睡眠薬をあげます。

光太 彼女はもう限界だ。10年持ったのが不思議な位だ。来週には新しいのがくる。そうなんですよ。

孝子 いう事を聞かないと看護師を呼びますよ。

光太 ……先生（にらむ）。

孝子 さあ、もう病室に戻りなさい。潮騒寮には明日もちゃんと顔を出すんですよ。

光太 これだけ、たのんでも。（とびかか
る）

光太、孝子の首を絞める。

孝子は看護師を呼ぶベルを押す。

孝子 やめなさい。

光太 瑞恵を愛してるんだ。命に代えても瑞恵を守ってやる。

孝子 落ちついて。私は彼女になにもしやしないわ。

光太 うそだ。彼女を捨てる気なんだ。

彼女はもう古い機械だからね。

孝子 彼女は口ボットじゃないわ。人間なの。

あなたは自分が書いた小説と・・・。

光太 彼女は人間だ。人間なんだ。

孝子、光太を払いのける。床に倒れ、せきこむ。
光太は瑞恵のところに走りよる。

光太 瑞恵！ 僕だよ。瑞恵！ 分からないのかい？

光太は瑞恵を抱きしめる。

光太 瑞恵！ 瑞恵！ 僕らは一緒になれないのかい！

瑞恵！・・・。
返事してくれよ。瑞恵！

瑞恵の目が一瞬見開く。
光太と瑞恵は見つめあう。

瑞恵・・・（口ごもる）。

光太 瑞恵。

瑞恵 ああ、あああ！

瑞恵、嘲るような狂気の高笑いをする。

光太・・・。

光太、瑞恵の首を絞める。
看護師1、2が入ってきて光太を瑞恵から引き離す。

光太 いやだ。放せ！

光太を取り押さえ、連れ去る看護師。
電話がなる。
都会の喧噪。

人々の足、足、足。
あたりが急に静かになる。

光太が電話にでる。

光太 はい。もしもし。もしもし、もしもし、あなたは誰。誰なんです。いつもいつも僕の耳元でささやきかける。
僕は・・・僕は気がついていました。
あなたの存在を。あなたが、どなたかであるか。

・・・。
何故あなたはその存在を隠してきたのですか。

僕の前に現れて、大昔の伝説のように奇跡を起こしてはくれないのですか。
あなたは長い間僕達のころろの中にいた。

でも、いくらまってもこの中にいるだけで現れてくれなかつたじゃないですか。

僕は、あなたを感じたかつたんです。あなたがいることを証明したかつたんです。僕が死ぬと一緒に消えてしまうような存在でなく。永遠の存在でいてほしかつたんです。

僕はそれを願つた。

ただひたすら願つて願つて願ひ続けた。

そしてある日、あなたは現れた。

やつと現れてくれた。

僕はあなたがいることが分かります。

なぜなら僕にはあなたの声はつきりと聞き取れるからです。

でもどうしてなんですか。

僕があなたに触れようとすると

あなたは激しくそれを拒絶する。

だから、僕たちはいつまでもあなたの姿を見るができません。

教えてください。

どうしてあなたは僕達を遠ざけるのですか。

激しく電話がなる。

都会の雑踏の音。

光太は看護士に連れていかれる。

光太 はなせ！ いやだ！

暗転。

幕